



「はっ……はえ……ああ……は……。」



「くくく、もっと舌を出……せ。」

「お……んお……あ……。」



「無駄な……事を……。」



「は……おー？、あ♡……えい……？、あっ♡、あっ♡。」





「ふぁ...はぁ、はぁ、はぁ...」

ズグッ

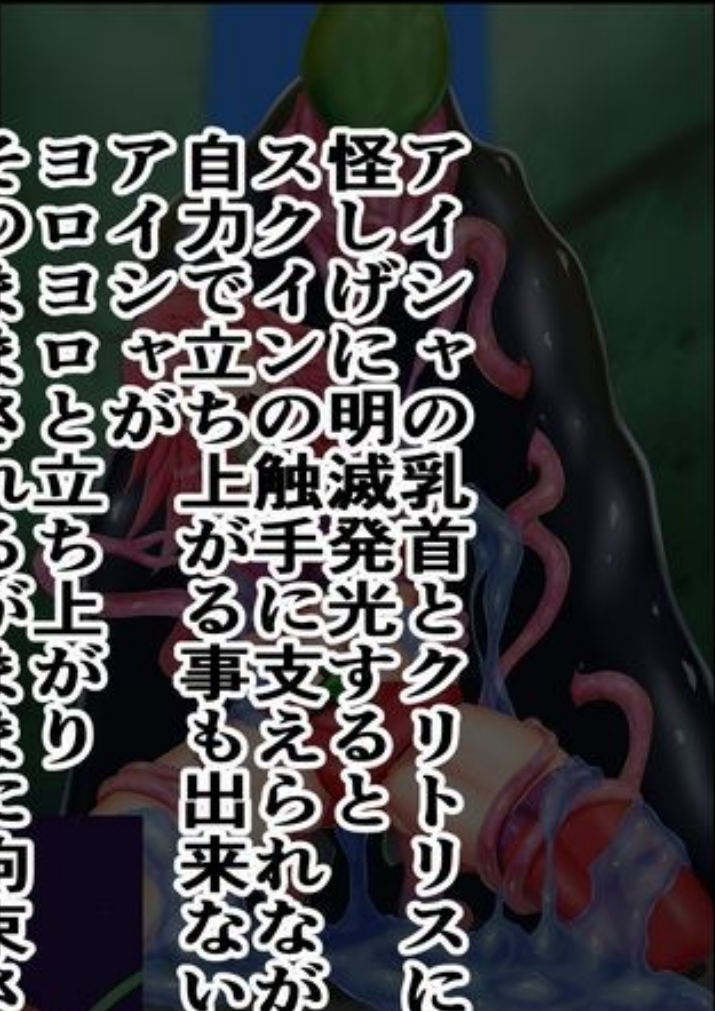
ズグッ

ある裏路地での奇襲、

アイシヤはマーゴ、スクインの作った怪しげな肉種を胸のタロスに取り付けられた。

肉腫はタロスに何かの効果を及ぼし、それによりアイシヤの体は著しい異常を来たし、その戦闘力はおるか体の自由すらままならない状態になってしまった。

その後肉腫は絶えず明滅を繰り返し、次第に緑色の外殻の様なモノが剥がれ始め中の肉部分がタロス全体を覆うように広がり遂には全体を包み込んでしまう。



アイシヤの乳首とクリトリスに取り付けられたリングが
怪しげに明滅発光すると
スクインの触手に支えられながらではあるが
自力で立ち上がる事も出来ない状態だった筈の
アイシヤが
ヨロヨロと立ち上がり
そのままされるがままに拘束されていく。



「…はあ、はあ…」

「ん？、お姉ちゃん動けるの？」

「ククク、コイツに取り付けた…ハッキングリングの効果…だ。」

「なにそれ？…ああ、この前言ってたやつ？」

スクインに言われ一旦アイシヤから離れていたスライムだが、
アイシヤが動いている事を不思議に思うと、
スクインがその事について説明を始める。

セクセク

「このリングを取り付けられた者の体は……俺の人形になる、
但し、このリングだけでは……駄目……だ。」

「んふあっ♡♡!?!」

突然アイシヤから驚きを含む喘ぎ声が漏れる。
スクインの体から歪な形の男性器のような形状の触手が現れ、
アイシヤの膣内へと挿入された為だ。

セクセク

「んっ♡やめっ…奥…は、あうあっ♡♡!」

ベタッ

セク

十分に濡れていた秘所に
粘液に塗れた異形の陰茎はすんなりと最奥まで到達する、

そして先端の触手群が子宮口を丹念に
解すように蠢きこじ開けようとしてくる刺激に
アイシヤの体は否が応でも反応してしまう。





「んあーっ！んくもっっっっっ♡♡♡」

ズグッ！

ひきかかっっっ

ズグッ

「んあっ……これ……あ……あっ……あ……あ……」

こじ開けたアイシヤの子宮に
スクインの陰茎触手から粘液が吐き出される。

最奥に吐き出された粘液は奇妙な熱をもち
アイシヤの体に浸透していく。

その感覚にビクビクと肢体を痙攣させるアイシヤ。

ビクビク

「リングは体内に取り込んだ
俺の体液と反応……して効果を露わ……す、

簡単に言えば……体液を注げば注ぐほど……
人形としての完成度は……あがるの……だ。」

「はうあ……んく……ふう……」

「へ〜でも人形って面白いの?。」

興味があるのか無いのか判別の付かない質問が
ゲル状の物体から発せられる。

「ふん、貴様ごときにはわからんだろう……が、
マーゴハンターでそれが……出来るといいう事が偉大……なのだ。」

セウ

「まあ、気持ちよさそうだからいいけど、
じゃあボクももう参加するよ?。」

自身の発明に興味を示さぬスライムにイラつくスクインだが、
スライムはどこ吹く風で再びの参戦を表明する。

「俺の邪魔をするのは……許さん……ぞ。」

「分かってるよ、ボクはお姉ちゃんと遊びたいだけだから。」

そう言うのとゲル状だった物体がウネウネと蠢き集まっていく、
集まった部分がぎゅっと凝縮しスライム独特の透明感が失われ
そしてその部分が持ち上がり、
人の上半身の様な形になっていく……。

ゼクゼク

ベタッ

「どう？ボクもこういいう事が出来るようになったんだよ、前に合った時より凄いでしょ！」

自慢気に語るスライムだが、以前在ったという言葉が引つかかったアイシャ。

（前……スライム……あ……）

「ん？あな……た、海……で、あっ♡ふっ。」

「覚えててくれたんだ！、ボク嬉しい！」

アイシャは昨年海で襲われたスライムの事を思い出す。あの時のスライムは全て消滅させた、そう思っていたがどうやら生き残っていたようだった。

ムク
ビク

（これは……まずいかも。）

アイシヤの中で現在の状況の危険度が上がる、

時折、特定のマーゴハンターに

異常に執着するマーゴというのが現れる事がある。

主な原因は

逃してしまったマーゴがその後復讐の為にというのが大半だ。

声色から憎しみの感情は伺えないが、

かつてない異常事態を迎えている自分の前に、

かつて倒したと思っただ敵が

明らかに以前よりも高い能力を持って目の前にいるのだ。

クグ



「んあああう♡!♡くうう!♡いっううう♡!♡」

再び背後のマーゴがアイシヤの子宮に侵食粘液を放出する、
マーゴが言うには体の支配を奪う類の効果があるらしいが、
今の自分はその効果は実感する事が出来ない、
自分でも分からない内に侵食が進んで行くことに
不安と焦りを覚えるアイシヤだが、
打開策が思い浮かばない。

♡♡♡♡♡(あう…くっ、ぞ、ドンドン…気持ちよくなってる…)

感覚を狂わされた体は
技術も無い抽挿と、短時間に放出される粘液に
軽い絶頂を迎える。

最初に子宮に注ぎ込まれた時に感じた怪しい熱が
次の放出で快感を伴ったものに変化していた。
おそろくは子宮からの粘液吸収に
粘液の効果が倍増してしまっただろう。

「でねーボクも色々出来るようになったんだよー、
って聞いている?。」

「んくぅ♡!、んあぁ…はっ…はっ…はっ…。」

ビクッ!

びゅん

びゅるるるっ

ムクッ

先程からスライムは
自分がこれまでどうい
った能力を手に入れたか等を
アイシャに自慢気に話して
いたのだが、
当の彼女は侵食粘液の放
出による快感に震えて
スライムの言葉など耳に
入っていない。

「んもーっ！、お話してるんだから邪魔しないでよ！」

「知った…事か、俺は好きにすると聞いた…だろ。」

「むーっ！、いいよ、じゃあボクも好きにするから。」

自慢話を聞いてもらえなくて不満なのか
スライムは頬を膨らませ抗議
するが、スクインはそれを一蹴する。

それに更に不満を募らせるスライムだが
相手にしても無駄と思ったのか、
自分のやりたい事を優先させることにした。

ムク
ビク

「んっ、何…を…んふ…あふ♡…。」

スライムがアイシヤの体に取り付き、
そこから全身に行き渡るように薄く薄く広がっていく。

「できた。んふふピッチピチー。」



広がったスライムがアイシヤの全身に行き渡る。
彼女の首から下は服の上も下も、手足の指先に至るまで完全にスライムに包まれていた。

表面はまるでラバーの様な質感を持ち、
極薄故に全てが透けている。

そんなラバーに包まれたアイシヤの腋にスライムの指先がそっと触れる。

「んあっ♡!、あうっ♡、んんっ♡♡♡!。」

「あはっ、相変わらずここが敏感なんだね。」





「その媚薬はマーゴハンター用だから……な、
壊れはしないだろうがお前のやり方……では、
今のコイツには効きすぎる……だろう。」

(…らめ…ら、も…う…たえら…れ…にゃ…♡♡♡♡♡)

秒ごとに快感は跳ね上がり、耐える事すらままならない快感がアイシヤの抵抗心の壁を決壊させようと滾々と沸き上がる。

そして決壊の時はすぐに訪れた――。

[illegible]

これまでに無い体の異常状態で与えられた強大な快楽は、
今まで余程の事が無い限り屈する事の無かったアイシヤの精神を
30分程度でドロドロに蕩かし、

今ではスライムのキスに自ら舌を絡めてしまっていた。

スクイン

中級マーゴ、優秀な頭脳を持ち、様々な発明品を作ってきた。だが過去に作った発明を他のマーゴに騙され横取りされて以来、他者とのコミュニケーションを嫌うようになっていった。

同時期に悪評も流された事で、二時期姿を晦ませていた事もあるが隠れて他のマーゴを見返す為の様々な研究を進めていた。

研究にある程度の成果があったのか、表舞台に姿を現すが、1人ではなにかと手が回らないため、ひよんな事から出会ったスライムと協力関係を結んでいる。

生物を人形のように操る体液を持つ能力がある、しかし効果がとても薄いという欠点があるが、その欠点はボディバックという技術を発明し、克服している。

常に黒い粘性の物体を纏っているが中に本体があり、変幻自在の触手を操る。

実は本体は著しく戦闘能力が低い。

